

D分科会

第8目標 患者参加 患者図書室づくり

患者図書室事例紹介

東邦大学医学メディアセンター

山口直比古

公開フォーラム“いのちをまもるパートナーズ”
医療安全全国共同行動第1回全国フォーラム
2008年11月24日 東京ビッグサイト

患者図書室のめざすもの

- 自分のからだや病気についての正しい知識を身につけるためのおてつだい
- 医療者の説明を理解するためのおてつだい
- 自分の治療方法を決めるためのおてつだい

患者図書室に必要なものは

- もの
 - 情報源となる本やパンフレット
 - インターネットで調べらる設備
- 場所
 - 本などの置いてある場所
- 人
 - 情報探しのおてつだいをする人
 - 専門の図書館員だといいですね

ブックトラックから始めた患者図書 (浜松赤十字病院 患者図書室)

1999年に、病院の事業として患者図書室活動がスタート。
毎週水曜日に、2階の外来近くにある多目的室に資料を運び、午後の2時間開室。
最初に用意できたのは、ブックトラック2台の健康図書(一般向けに、病気、食事療法、生活ガイドなどについて書かれた本)100冊。

とてもささやかな患者図書室でしたが、患者さんは毎回楽しみに来て下さり、よく利用されました。

老朽化が激しいため、2007年11月に新築移転しました。新病院では今までの患者図書室活動を踏まえて、12月から医学図書室の公開を始めました。約133㎡と非常に小さな図書室ですが、患者さんの閲覧コーナーを設け、インターネットで検索できる患者さん専用のパソコンも設置しています。

毎日開室していますので、入院患者さんだけでなく、外来患者さんやお見舞いの方、人間ドックにいらした方など、色々な方に利用していただけるようになりました。病院機能評価では、患者図書室活動が高い評価を得ているそうです。患者図書室は患者さんにとっても、病院にとってもメリットのある活動ではないでしょうか。

会議室にブックトラックを置いてサービスを開始した当初



新病院オープンと同時に解説された、新しい患者図書室



オープンスペースに開設した患者図書室 (亀田総合病院 プラタナス)

2001年に患者図書室『プラタナス』を開設。

入院棟の1階のオープンスペースにあり、コーヒーショップやギフトショップ、福祉用具ショップなどが併設されどなたでも気軽に立ち寄ることができます。

担当者には、看護師や職員用図書室の担当者、図書館勤務経験者などもおり、それぞれの得意分野を活かしたサポートを行っています。

設置している本は、一般向けのわかりやすい説明のものを中心にとり揃え、一部、専門職が使用できるような辞書等も置いています。パンフレットは24時間持ち帰ることが出来ます。

担当者在室時にはインターネットを利用して調べたい情報を得ることもできます。当院のホームページをご覧になる方が多く、スタッフ紹介のページ・人間ドックのページが人気です。

「ありがとう」「また利用します」という声をかけてくださる利用者、退院の報告に来てくださる患者さまに、患者図書室は必要とされているのだと再認識させられます。

インターネットが使えます



オープンスペースでくつろげる空間にある



外来前に設置され、一日の利用者が100名を超える (東京女子医大 からだ情報館)

総合外来センターに設置された患者図書室で、外来や入院中の患者さん、お見舞いの方々はもちろんのこと、地域住民の方々にも広く開放され、定期的に当室主催の講演会も開催。

病気や健康について学習する場所であり、そのための資料と設備を設けています。

利用者を支援するために、図書館司書と看護師/看護師ボランティアが常駐しています。

様々なレファレンスに対して、図書館司書が所蔵資料を紹介し、検索のサポートも行ないます。一方看護師は医療に関する質問を受け、時には具体的なアドバイスをするなど、医療面での援助を担っています。

「からだ情報館」では、患者さん自身が色々な情報を集められるように工夫しています。

広々とした空間に多くの利用者が訪れます



病院内に癒しの空間も提供 (東邦大学大森病院 からだのとしよしつ)

「からだのとしよしつ」は、インフォームドコンセントを支援し、患者さんに医学情報を提供する目的で、平成17年4月東邦大学大森病院内に開設されました。医学部の図書館である医学メディアセンターより司書が派遣され、ボランティアの方とともに運営にあたっています。

床や壁、カーテンなどに工夫をこらし、病院内に癒しの空間を作るという目的も持っています。室内には静かに音楽が流れ、樹木や花、絵画なども飾られています。給茶器も置かれ、お薬を飲んだりお茶を飲んだりしてくつろぐこともできます。

図書やパンフレットなど、資料の選書は司書が行いますが、必ず患者図書室運営委員会の承認を経て提供しており、選定する資料について、司書が責任を問われることはありません。

毎日25人ほどの利用者が来室しますが、一人あたりの滞在時間が比較的長いことと、繰り返し見える患者さんが多いのが特徴です。

インフォームドコンセントの支援と癒しの空間を提供



医局図書室と併設し、医師も患者も利用できる (京都南病院図書室)

1970年から医学専門図書室に、医学専門書のほかに文学書など読書の本も揃えて入院患者さんや地域の一般市民にも開放しました。

とくに病院の図書室として、病気や健康に関しては正しい知識が得られるよう著者、内容、出版社を吟味して選択されます。

1997年1月からは医師や専門医療スタッフのための医学専門書も、患者さんや一般市民も利用できるようにしました。医師と患者さんが笑顔で話しあう風景も見られます。

医学情報の提供サービスと、読書が好きな患者さんや地域の人々のミニ公共図書館として活動しています。

患者も医師もいっしょに利用できる



一般書もあり、巡回図書サービスも実施 (大阪厚生年金病院 患者情報室ラヴェンダー)

2005年7月に患者情報室ラヴェンダーがOPEN(平日9-12時)

ボランティアが中心となった運営形態で、運営方針については医師、看護師、事務職員、司書をメンバーとした患者情報室運営委員会で決定される。

2004年12月に病棟において、入院患者を対象とした図書巡回サービスが先に開始されていた。

ラヴェンダーの“名付け親”でもある清野佳紀院長は患者情報室について、「患者様が病気や薬などの知識を入手できるよう医学書や医学のパンフレットなど、医療に関する資料を取り揃え、司書の資格をもつスタッフが常駐することで専門知識を生かしながら、患者様の気持ちに寄り添った医療情報が提供できる」と語り、当院の患者様のみならず、利用を希望するすべての人に施設の利用を許可している。

一般書も多く、巡回図書サービスも実施している



さらに多くの患者図書室をご覧になれます

いいなステーション「医療情報が入手できる施設一覧

<http://www.e7station.com/html/library/>

日本病院ライブラリー協会「患者図書室の紹介」

<http://jhla.org/kanjya/kanja-1.php>